



前沢 浩子(まえざわ・ひろこ)

津田塾大学大学院文学研究科博士課程英文学専攻を単位取得満期退学(文学修士)。獨協大学着任後は英語学科長、国際交流センター所長を歴任。2024年4月1日より学長に就任。

- 2006年 獨協大学外国語学部英語学科助教授
- 2011年 獨協大学外国語学部英語学科教授
- 2017年 英語学科長
- 2020年 国際交流センター所長
- 2024年 学長

## 創立六十周年を迎え、「学問を通じての人間形成の場」として進化し続ける ——学長 前沢 浩子

多様な環境の中で育まれる  
伸び伸びとした成長

入学式やガイダンス、履修登録など、新学期のあわただしさは、ひととおり落ち着いたら、獨協大学のキャンパスは、美しい緑にあふれかえります。プロムナードの桜並木は葉桜へと姿を変え、雄飛ホールから天野貞祐記念館へ向かってまっすぐに続く銀杏も、柔らかな若葉の並木となります。生気を放つ新緑の木々の下を、新たな学年を迎えた若者たちが行き交い、明るい談笑の音が空気に華やきを添えます。

そのような新緑の季節を一年、また一年と繰り返し、獨協大学は今年、創立六十周年を迎えました。六十年前の春、創設者であり初代学長であったカント学者、天野貞祐先生は第一回目の入学式で新入生に向かって、次のような哲学者ヘーゲルの言葉を語りました。

一本の果物の樹がどういふ果物を実って、その果物がいかなる大きさを持ち、いかなる形を持ち、いかなる匂いを持ち、味わいを持つかということは、その一本の大きな果樹の芽生えの中に入っている。

ラムが導入されました。学生主体のプロジェクトを中心とした科目や、大学の外の機関や組織と協働する科目も新たに始まります。またITやデータサイエンスの知識やスキルを身につける「情報科学教育プログラム」も、本格的に始動します。こうした新しい科目だけでなく、従来からある伝統的な学問分野でも、常に新しい問いが立てられています。哲学でも、法学でも、文学でも、学問は閉じたものではなく、ダイナミックに変化する世界に向かって開かれています。歴史を踏まえつつ、今の時代を分析し、次の時代への展望を探る。そこに学問の面白さが、必ず見つかるはずですよ。

獨協大学の正門を入ってきた正面には、メタセコイアの木が規則正しく並んでいます。中央棟が建てられた一九八一年に植えられた時には、どんな高さだったのだろうと、その林を通り抜けながら、私はしばしば空想します。今、メタセコイアの木々は、空に向かって突き上げるように、その梢を伸ばし、そばに並ぶ三本のフラッグポールをゆうに超える高さになっています。このメタセコイアの木のように、どこまでも伸びやかに、新しい時代に向けた「学問」を追い求めていきましょ。

れています。学生のみならず、ひとりひとりも  
大学人です。

しかし、動植物の遺伝子が環境に適合しながら組み替えや変異を起こし、多様性を生じさせながら、種としての進化を経験するように、私たちが受け継いでいる建学の理念もまた、固定的なドグマではなく、多様性に向かって開かれ、進化していくものでなければいけません。「学問を通じての人間形成」という言葉にどのような意味を見出していくのか、学生も教職員も問い続けていくことこそ、獨協大学の進化を促し、発展を支える理念です。

### 時代の急激な変化に対峙し、 学問のあり方を問う

デジタル情報技術の進歩は活版印刷出現以来のメディア革命を起こしました。AIはこれから急激な進化を遂げます。近代的な政治経済の基本的価値観として受け入れられてきた民主主義と資本主義に対して、懐疑の念や行き詰まり感が広まり始めています。地球環境の破壊が人類全体の課題として深刻に論じられる一方で、世界各地で民族対立や国境紛争が起きています。このような世界的な転換点に私たちは立っています。この時代に「学問」のあり方を問うことこそ、大学に身を置くすべての人、大学人に求めら

### 世界のダイナミズムを感じながら 伝統×進化する学びを吸収する

獨協大学では二〇二四年度から新カリキュ

この言葉は大学の発展や人の成長を、樹木の有機的な変化に例えています。プラスチックや金属でできた工業製品とは異なり、自然の中の樹木は完成形が決まっています。環境の変化に適応しながら、芽は殻を突き破って土から顔を出し、若苗は空へと伸び、やがて木は枝を広げ、花をつけ、果実を实らせると。その果実を突き破って、また新たな種子が次の芽を生じさせる。そのようにして多様な変化を遂げながら、小さな芽生えはやがて大きな森へとも成長しうる。そのような豊かな自然の営みを心に思い描きながら、天野先生は小さな芽生えである第一回目の入学生に向かって成長への期待を語り、獨協大学の発展を心に期しておられたのだと思います。

それから六十年、当初、外国語学部と経済学部の二学部三学科で始まった獨協大学は、現在、四学部十学科と大学院を擁する文系総合大学へと大きく発展してきました。その六十年の発展の基盤となったのは、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という建学の理念です。建学の理念とは、いわば樹木の中に組み込まれているDNAです。「大きな果樹の芽生え」の中に吹き込まれた天野先生の精神は、遺伝子のように受け継がれながら今日まで継承されています。